

Title	姥山II式土器に関する二・三の問題
Sub Title	Some problems on the potteries of the latest Jomon Culture in Kanto (関東) District
Author	鈴木, 公雄(Suzuki, Kimio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1964
Jtitle	史学 Vol.37, No.1 (1964. 6) ,p.69- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19640600-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

姥山Ⅱ式土器に関する二・三の問題

鈴木 公雄

一 序

筆者は先きに千葉県山武郡横芝町姥山遺跡の晩期縄文式土器について、その概要を発表する機会を得たが、その中で姥山Ⅱ式土器と呼んだものは広義の安行Ⅲ式土器に包括されるものと思われるが、その諸特徴は、従来指摘されている安行Ⅲ諸型式のそれとの間にかかなりの差異が認められ、たやすく両者の対比がなし得ないことを指摘しておいた。^①この両者間にみられる差異が、具体的にいかなる点にあるかを明らかにすることは、最近特に問題とされている安行Ⅲ諸型式土器の再吟味とも密接な関係をもち、関東地方縄文文化晩期前半の重要な研究課題の一つといえる。先の概報において筆者は、かかる問題を十分検討する余裕を持たなかつたが、その後の各方面

における研究成果及び筆者等の知見などによつて姥山Ⅱ式土器の資料がかなり蓄積され、姥山Ⅱ式に関するいくつかの問題が、より明らかにされつつある。従つて本稿においては、これらの成果に基いて姥山Ⅱ式土器の土器型式としての特徴、具体的内容をさらに再検討し、又その分布を考察し、あわせて安行Ⅲ諸型式土器との比較を行い姥山Ⅱ式土器の性格・関東地方晩期縄文土器の編年上に占める位置等の点を明らかにしてみたい。なお本稿作成にあつて、早稲田大学西村正衛教授、元大山史前学研究所々員竹下次作氏、本塾清水潤三教授等の方々から未発表資料の使用を許され、又明治大学杉原莊介教授からも資料に関する様々な御教示を賜わつた。ここに記して深く感謝をささげたい。

二 姥山Ⅱ式土器の内容及その特徴

姥山Ⅱ式土器の諸検討を行うにあつて、先づ姥山遺跡において我々が注意した姥山Ⅱ式土器とは、どの様な器形・文様上の特徴を有するものであるかと云う、本式土器の内容を改めて明確にしておく必要がある。筆者の云う姥山Ⅱ式土器は、以下のような内容をもつものである。

- (a) 四ないし五単位の大きな波状口縁をもつ深鉢形土器。これには筆者が稲妻状磨消文様と呼んだ特異な文様と、沈線による入組文・列点・円圈文などが施される。口縁各波頂部には、粘土紐による貼付文がつけられる。(第1図1・3)
- (b) 平縁でやや内傾し、胴の幾分はり出した深鉢形土器。口辺より胴部最大径の付近までの間に、磨消帯縄文による二帯の杵状文が描かれ、胴部以下には斜方向の条線が施される。(第1図11・13)
- (c) 四ないし五単位の外反する大きな波状口縁を有し、やや胴のくびれた浅鉢形土器。口縁各波頂部には粘土紐による貼付文がみられ、外反する口縁

には斜縄文がつけられ、まれには沈線による入組文・曲線文が施される。胴部には横走する帯縄文をめぐらしたものが多い。(第1図6・10)

- (d) 文様構成は(c)と全く同様だが、平縁の浅鉢形土器。この手のものには小形の皿形土器もあると思われる。(第1図4・5)
- (e) 平縁で、口縁部がやや内傾し倒卵状にはり出した胴部と、すばまつた小平底を持つ深鉢形土器。口縁付近は横方向胴以下は斜ないし縦方向に安行式特有の条線が施されるが、安行Ⅱ式などにみられる様な紐線文を欠いている点に大きな特色が見られる。(第1図7・8)
- (f) 小形の碗形土器。精粗の二者がある。精製と認められるものには、沈線による入組文・帯縄文などが施されるが、粗製のものは多く素文で、土質もややおとる。横走する沈線がめぐる場合もある。(第1図9)

以上であるが、この他筆者等の最近の姥山遺跡における調査ないしは他の資料にもとづいて、これらの他にもなお二・三の器形を付加すべきことが明らかとなつた。

それらはさきに姥山遺跡の土器について概報した時にはその存在・性格が明確ではなかったが、あらためて姥山Ⅱ式を構成する土器として認められたものである。

(g) 形態は(e)と同様な内傾する口縁とやややはり出す胴を持つた深鉢形土器であるが、やや全体に小形化する。文様は口唇上に一定の間隔をおいて細刻を施し口縁より胴部上半にかけて、細密な沈線を施し、それを沈線により半月状ないし長方形に区劃し、すり消し文様を描く。細密な沈線は、ある場合には矢羽状に施文される。土質・焼成は良好なものが多い。(第1図14・15)

(h) 口縁が外反し、頸部及胴部がく字に屈曲する点に特徴があり、一部には変形広口壺に似た形態をとるものも認められるが、深鉢形となるものも多いようである。外反する口縁には斜縄文がつけられ、稀には素文となる。そこからく字に屈曲する胴部までが文様帯となり、沈線による連続波状入組文、磨消帯縄文などが施される。この器形は安行Ⅲc式、前浦式等にもみられる。(第1図12・16)

以上(a)・(h)に示したものが、姥山Ⅱ式を構成する土器群の類別である。この中で、(a)・(c)・(d)・(f)の一部・(h)などが精製土器。(e)が粗製土器・(b)・(g)などが所謂半精製ないし半粗製土器と云う風に分類出来る。注口土器及台付土器の存在が明らかでなく、これが残された問題といえるが、或は大洞系の土器を借用しているのかも知れない。以上の様な姥山Ⅱ式土器の特徴を列挙すると次の様になる。

- ① 精製土器の主要な文様は、磨消縄文手法と云う文様表出技法によつて描かれる。
- ② 三叉文ないし三叉状入組文は、主要な文様要素とはなり得ず、むしろそれらを欠除する点に特色が認められる。
- ③ 口縁部につけられる突起は、粘土紐による貼付文である。
- ④ 稻妻状磨消文・連続棒状文・沈線入組文・沈線による連続波状入組文などが主要な文様と認められる。
- ⑤ 粗製土器は口縁は紐線文を持たず、全面に条線が施された簡素なものである。

⑥ 精製土器の内、(a)・(b)などは明らかに安行Ⅱ式土器の伝統をうけついでいる。

⑦ これらの中で、セットの中心となるべきものは、(a)・(b) (深鉢形)、(c) (浅鉢形)、(e) (深鉢形)、(h) (深鉢形・変広口壺)などがあげられる。これらは姥山Ⅱ式土器の組合せの基本的なものである。

以上姥山遺跡の例を中心とし、姥山Ⅱ式土器の特徴及びその内容を具体的に示した。以下これらの土器が、いかなる分布を持つものであるかを明らかにしたい。

三 姥山Ⅱ式土器の分布

現在まで、本式土器を出土した遺跡として筆者が知り得たものは左の如くである。

- (1) 千葉県八日市場市多古田遺跡
- (2) 千葉県成田市荒海貝塚
- (3) " 成田市花輪貝塚
- (4) " 船橋市金堀台貝塚
- (5) " 印旛郡天神台貝塚
- (6) " 山武郡姥山遺跡
- (7) 埼玉県岩槻市真福寺遺跡

(8) " 大宮市膝子遺跡

(9) 茨城県水海道市築地遺跡

(10) 群馬県邑楽郡板倉沼遺跡

次にこれらの出土資料について、簡単に説明する。

(1) 多古田遺跡²⁾

資料的にそれほど多量ではないが、(a)・(b)・(c)・(e)・(f)・(h)など、ほぼ姥山Ⅱ式を構成する土器が全て存在する。中には二・三新例とすべきものもあるが、大略姥山遺跡の資料と近似するものである。

(2) 荒海貝塚

荒海貝塚の晩期前半の資料は未発表資料であるが、特に資料の使用を許された西村教授に深く感謝する。第2図1・8に示したように、(a) (第2図1)、(b) (第2図5・6)、(d) (第2図4・8)、(e) (第2図7)、(h) (第2図3)などの存在が知られる。特に(a)・(b)・(d)などの器形・文様は極めてよく一致しており、これらは姥山出土例の対比資料として極めて良好な内容を持つものである。その他第2図2のように、(c)のような波状口縁の浅鉢と思われるものもみられる。

(3) 花輪貝塚³⁾

「印旛手賀」所載の図版によつてみると、(a)・(b)・(e)などの形態が存在しているが、他は不明である。この中で、(e)の粗製土器は姥山のそれと全く一致するもののようにである。報告者は、これらの土器を安行Ⅲ a 式対比の土器と考へておられるようである。

(4) 金堀台貝塚

「印旛手賀」所載の資料からみると、(a)・(f)・(g)の形態に相当すると思われるものが存在する。器形などはかなりよく似たものであるが、文様は(a)・(g)などにおいてかなり異つた要素もみうけられる。

(5) 天神台貝塚

「印旛手賀」に示された資料によると、(a)の存在が確認されるが、その他に関しては不明である。報告者によると、この土器は安行Ⅲ a 式対比の資料として説明されている。

(6) 姥山遺跡

すでに第二章に詳述したので省略する。

(7) 真福寺遺跡

甲野勇氏の報告⁽⁷⁾及竹下次作氏所蔵の資料⁽⁸⁾に基いてみると、(a) (第2 図17・20)、(g)・(h) (第2 図18・22・23)な

姥山Ⅱ式土器に関する二・三の問題

どに類例が見出だせるがその他については明らかでない。第2 図19は平縁の浅鉢(d)に相当すると思われるが、確かなことはわからない。(a)は図示したとおり、ほゞその形態を知り得るものもあるがその文様は姥山のものとはやや様相を異にしており、後述する茨城県築地遺跡出土例に近似している点に興味を引かれる。姥山Ⅱ式土器の地域的な差異を示すものと思われて注目に価する。(g)及(h)は図に示したものの他にも好例がいくつか存在するが、これには姥山例に類似するものが多いようである。これらの資料は、大山史前学研究所が戦災に会つたさい、全て焼失してしまつたもので、竹下次作氏のノートにからくも残された貴重なものである。この点竹下氏に深く感謝したい。

(8) 膝子遺跡

昭和三十二年本塾で調査した際の資料である。量的に充分とは云えぬが、第4 図23に示した様に(a)に属するものが存在している。しかし粗製土器はかなり様相が異なるようである。

(9) 築地遺跡

筆者等が昭和三十八年に調査を行つた。この遺跡は姥

山Ⅱ式を出土する単純遺跡でありこの型式におけるセツトを考へる上で極めて貴重な資料を提供している。出土土器の分類を次に示そう。

(A) (a)に相当する形態を持ったものである。第3図

1・2に示したような器形を推定し得る様な資料二点を含む十九個体分の破片を得た。器形は姥山例のものに類似するが、文様は第3図2に示したように、磨消縄文の施される位置が反対になつていたり、正確な稲妻状文を形成しないもの(第3図1・2)もみられ、これなどは真福寺貝塚例(第2図17)と類似している。又、第3図1には、小形化した豚鼻突起が施されているが、これなどは、姥山Ⅱ式が安行Ⅱ式の伝統を引くものであることを示している。

(B) (b)に相当する形態を持ったものである。大破片一を含む二十四個体分の破片が得られた。文様・器形ともに第3図5・9に示したように、ほぼ姥山例と一致するが、第3図8のように、多少変化のみられるものもある。

(C) (c)に相当する波状縁の浅鉢形土器であるが、第4

図20・21に示したものがそれにあたると思われる。これらは姥山例と異り、外反する口縁には縄文が施されず、反対にすり消され器面が研磨されている。本類は量的に乏しくわずかに三個体分の破片を検出し得たにすぎない。

(D) (d)に相当する平縁の浅鉢形土器である。第3図3・4第4図22に示したものがそれにあたるが、多くの場合口辺部破片の特徴が第4図1・15・17に示したような土器と極めて酷似するため正確な個体数の確認が出来ない。(後述の(H)の項参照)なお、第4図22のようなものは、本類土器としては極めて例外的な形態に属するものである。

(E) (e)に相当する形態を持った粗製土器である。第4図5・7に示したように、その形態は姥山例と全く一致している。五十六個体分の破片を得た。

(F) (f)に相当する椀形ないし皿形の土器である。まれに第4図8の様な沈線を二条底部にめぐらせたり口唇上に細刻を施したり(第4図9)する他は第4図10のような素文のものが多い。十一個体分の破片を得た。

(G) (g)に相当する形態を持ったものである。二十個体の破片を得た。文様・形態とも姥山例に近似している。(第4図18)

(H) (h)に相当する形態を持ったものである。本類も又先に姥山遺跡の場合で述べたと同様に、深鉢形の形態をとるもの(第4図1)と変形広口壺の形態をとるもの(第4図15・16)の二者が存在する。従つて本類は将来、くの字に外反する口辺部を持つた深鉢形土器と、口辺と胴部がくの字におれまがる広口壺形土器の二者に分離される必要があると考えられるが、類例の少い現在にあつては一応一括して分類しておくことにしたい。また本類の外反する口辺部の特徴は、前述した(D)類土器のそれと酷似しており一部の大破片を除いては、口辺部破片におけるD類、H類の分離はかなり困難である。個体数は(C)及(H)を合計して五十六個体分を算える。

(I) 第4図2・4に示したような、平縁で口辺が直立ないしやや内傾する深鉢形土器である。口縁近くに幅二纏ほどの帯状縄文が横走するのが特徴で、

(J) 以下胴部上半までが文様帯となるらしく、そこに沈線を縦または斜方向に引き、或は半月状の曲線を引いて磨消文様を描くものが多いようである。この種の土器は、姥山遺跡においては従来あまり知られていなかったものである。二十三個体分の破片を得た。

無文の深鉢形粗製土器である。全体の形態は(E)の粗製土器に類似するものが多いようであるが、口辺部の断面形は、第4図11・14に示したように、(E)の粗製土器とは異なる。おり返し口辺を持つものはない。焼成・土質は(E)よりも粗悪軟弱となるものが多く細砂を含んだものが目立つて来る。二百一十個体分に相当する破片を得たが、このような多量の無文土器の存在は、姥山遺跡においてはみられなかつた現象である。その個体数からみて、本遺跡の粗製土器の主体は、(F)の如きものではなく、本類のようなものであつたとみなさねばならない。この様な粗製土器の存在や、前述の(I)の様な土器の存在は、姥山Ⅱ式の地域を異にした場合の組成を検討する上での重要な資料とみなすこと

が出来る。

以上が築地遺跡出土の姥山式土器の大略である。これらの他に、姥山Ⅲ式土器、大洞B—C式、同C₁式、安行Ⅲa式、同Ⅲc式などが若干発見されている。大洞B—C式は口辺近くに陽刻による整った羊歯状文が配され、土質も硬緻なものである。大洞C₁式は多少東北地方の文様にくらべ関東化されたような、所謂くずれたものであり、土質も粗悪となる。厳密に云えば大洞式土器の範疇に入れるのはあやぶまれるものだが、今は一応大洞C₁式類似の資料として扱っておく。姥山Ⅲ式として一括されるもの四十一個体分の中で十六個体分は、姥山Ⅱ式と同様な文様構成をみせつつも、縄文を欠除したものであり、器形上から云うと、(A)及(I)に相当するものが各々三个体づつ、(D)及(H)に相当すると思われるものが十一個体分である。残りの二十五個体のもはこまかな刺突文と沈線によつて文様が構成されるもので、器形には、小形鉢、深鉢などが認められるが、多くは小破片であり、器形の推定は多く困難である。この様な一群の土器が、姥山Ⅲ式の範疇に属するものであるか、或は安行Ⅲc式の一部として扱うべきであるかは、問題のある所と思われる。

る。本稿において、筆者がこれらの資料を安行Ⅲc式とは異なるものとして扱った根拠は、安行Ⅲc式の列点と、上記の資料の刺突文が異なるものであると認める点にある。安行Ⅲc式として一括される土器に施される点列文の多くは、横に長い米粒状の列点であるに對し、これらの刺突文の多くは、器面に對し、上方ないし斜上方から単に突きさしたものである。また、安行Ⅲc式の相対的に古い様相を持つものではないかと云われる石神貝塚の貝層外出土の土器群にみられる列点文も、多くは米粒状の列点文であり、本遺跡の刺突文とは異なるものの様である。²⁸⁾(g)この様な相異が、安行Ⅲc式の地域を異にした場合に起る変化であるか否か、現在の所明確には決定出来ないが、現状においてはこれら刺突文を有する土器は安行Ⅲc式とは異なるものとして本稿では、一応姥山Ⅲ式中に含めて扱うこととし、将来の検討にまきたい。

上述のごとき築地遺跡出土土器の分類を、図表によつて示せば第一表の様になる。これらの中で、(A)・(B)・(E)・(F)・(G)などは、多少の偏差を含むとはいえ、ほとんど姥山遺跡の出土例と合致する内容を有し(D)及(H)も両者の分離が困難であると云う点を除けば、それほど姥

土器式	分類	個体数	大破片	合計	%
姥山Ⅱ式	A	17	2	19	4.0
	B	23	1	24	5.1
	C	3		3	0.6
	D				
	E	56		56	11.9
	F	10	1	11	2.3
	G	20		20	4.2
	H	54	2	56	11.9
	I	23		23	4.8
	J	210	1	211	44.7
姥Ⅲ山式		41		41	8.7
大洞Ⅰ式		2		2	0.4
大洞Ⅱ式		1		1	0.2
安Ⅲ式 行a		3		3	0.6
安Ⅲ式 行c		2		2	0.4
不明		1		1	0.2
合計		465	7	472	100.0

第 1 表
築地遺跡出土土器の分類

山例と異なるものではない。姥山例と相異なるものとしては、(G)・(I)・(J)などがあげられる。この内で特に(J)の粗製土器の問題は興味がある。関東地方の晩期縄文式土器が、精製土器においてはほぼ共通した性格を保ちつつも、粗製土器において異ると云う事実は神奈川県杉田遺

跡と群馬県千網遺跡との間においてもみられた現象であり、晩期縄文式土器においてはむしろ一般的な現象と云えるかも知れないが、杉田遺跡と千網遺跡よりも、さらに接近した距離にある築地遺跡と姥山遺跡においても、同様な現象がみられたと云うことは、かなり接近した地

域内においても粗製土器に相異が生じる場合のあることを暗示するものと思われる。このように、晩期縄文式土器においては、精製土器によつて統一される大きな分布圏とは別に、粗製土器の相異に基くよりせまい地方差をその中に考えることが出来るようである。かかる土器にあらわれた地方差が晩期縄文文化のいかなる事情を反映したものであるかは慎重な検討を必要とするとしても、これらの点を検討することから、複雑な様相を呈する関東地方晩期縄文式土器の性格の一端を明らかにすることが可能となると思われる。

次に姥山Ⅱ式のセットと個体数の問題に多少ふれてみたい。第一表にも示したとおり、築地遺跡より出土した姥山Ⅱ式土器は、浅鉢ないし皿形三種 (C)・(D)・(F)、深鉢六種 (A)・(B)・(E)・(G)・(I)・(J)、広口壺一種 (H) から成るが、この内でセットの中核を占めるものは浅鉢二種 (D)・(F)、深鉢五種 (A)・(B)・(G)・(I)・(J)、広口壺一種 (H) である。作風の精粗によつて分けると、精製土器四種 (A)・(C)・(D)・(H)、半精製ないし半粗製土器 (粗製土器と同様の器形を持つているが、精製土器に類する文様の施されているもの) 三種 (B)・(G)・(I)、粗

製土器三種 (E)・(F)・(J) となる。全粗製土器は全体の約五十八%を占め、中でも (J) は単独で全体の四十四%以上と圧倒的多数を占める。さらに精製ないし半製土器と粗製土器との割合を求めると、全精製土器三十一%、全粗製五十八%となる。これと天津市滋賀里遺跡出土の晩期縄文式土器における精製二十四%、粗製七十一%と云う割合とを較べてみると、築地遺跡²⁷⁾においてはやや粗製土器の占める割合が少い感を受ける。しかし両者の土器分類のしかた或は数量処理の相異などを考慮するならば、それほど異なるものではなく、むしろ両者はほゞ相似た割合を示すものであることが知られる。又、築地遺跡²⁸⁾において、精製ないし半精製土器の中で、(A)・(B)・(G)・(I)などは各々全体の四〇五%を占めており、ほゞ一定の値をとっている点は面白く、これは本遺跡における土器の組成がかなり安定した内容を持つものであることを示している。

以上のような築地遺跡出土資料が示す所は、一部に土器型式の地方性を示すと考えられる偏差を有しつつも、ほゞ姥山Ⅱ式土器の基本的組合せ、型式上の特徴を保持しており、この種の土器型式がかなり広い範囲にわたつ

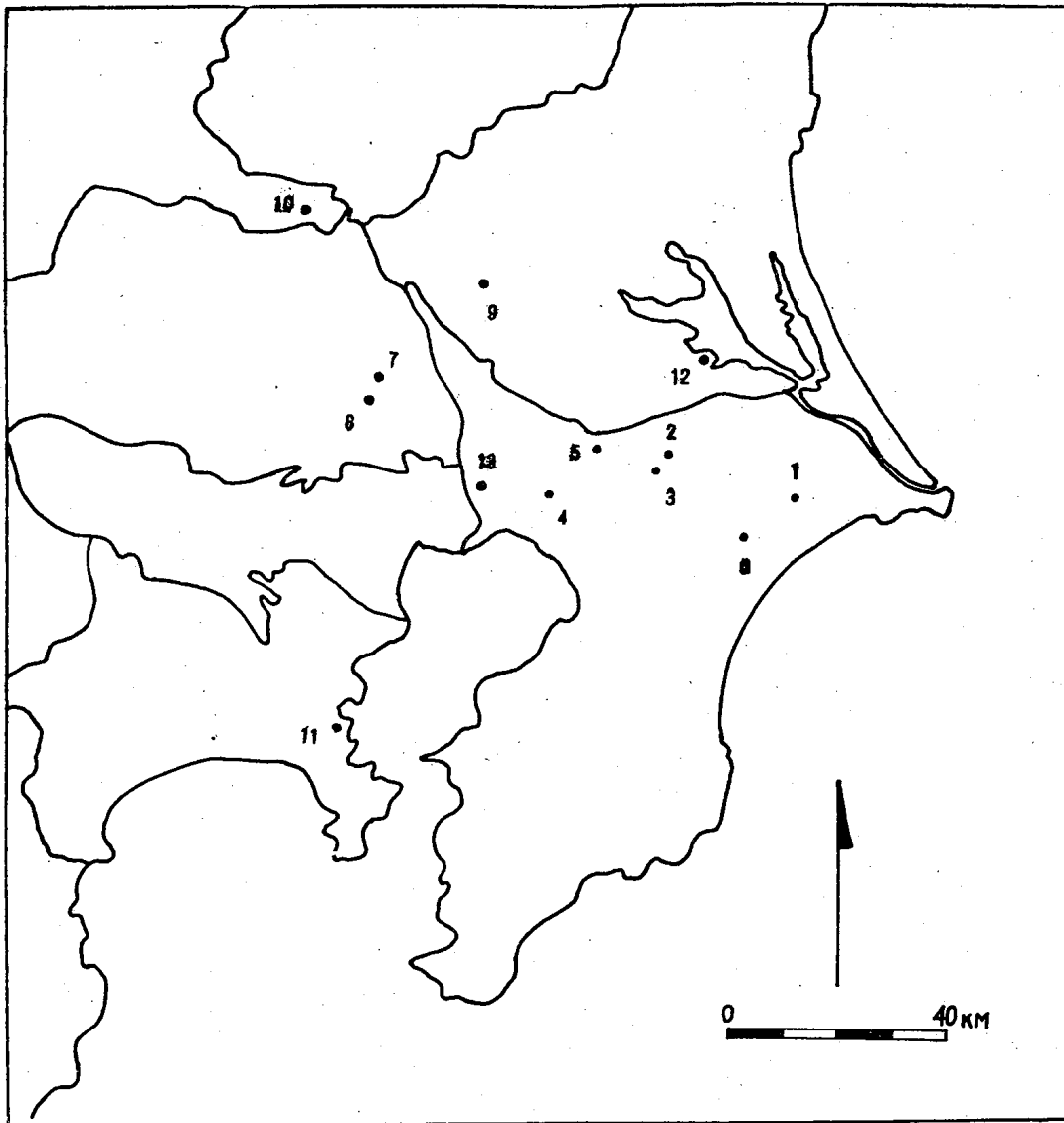
て分布するものであることを物語っている。又この中で、姥山Ⅲ式土器に相当するものが、四十一個体全体の約九%しか存在していないと云う事実は重視されるべきで、これは姥山Ⅲ式と姥山Ⅱ式が同一な土器型式を構成するものではなく、両者は相互に分離されるべきものである可能性を示すものとみられよう。

(10) 板倉沼遺跡

昨年本塾に寄贈された川島守一氏の資料中に、量的には少ないが、(a) (第2図9)、(f) (第2図10)、(h) (第2図11・13)、(d) (第2図12) などに相当するものが存在している。(a)及(f)は姥山例と全く一致する好資料と云えるが、(d)及(h)は文様構成が多少異なるようで、特に第2図13のように、三叉入組文を有する点などは注目したい。又本遺跡からは、安行Ⅲc式に相当する土器(第2図14)安行Ⅲc式と姥山Ⅲ式の両者の特徴を有するもの(第2図15)、前浦式に近似した文様表出法を有するもの(第2図16)などが存在しており、興味をそそられる。その他、大洞B—C式ないしC₁式に類似するものもみられるが、量的には前述したように少い。

以上の十遺跡について、その出土資料の概略を記した

が、これらの遺跡のほか、茨城県広畑貝塚、神奈川県杉田遺跡、千葉県堀の内貝塚、同佐倉市天神前遺跡などからも、姥山Ⅱ式に相当する土器の出土が認められたと云われ、⁽¹²⁾又発表の自由を持たぬ二・三の遺跡においてもその存在は確実であると云う。これらの遺跡をも加えると、現在までに筆者の知り得た姥山Ⅱ式出土遺跡は、千葉県に八遺跡、埼玉県に二遺跡、茨城県に二遺跡、神奈川県群馬両県に各一の十四遺跡以上の存在が知られる。それらの遺跡の分布を求めてみると次頁のようになる。それによつてみると、姥山Ⅱ式土器出土遺跡は下総台地周辺に集中する傾向が認められる。現状においては必らずしも遺跡数が充分であるとは云えず、今後の調査による遺跡の増加等によつて分布には多少の変化を生じることが予測されるとしても、姥山Ⅱ式土器が、利根下流地域から下総台地付近の所謂関東東南部に分布の中心をおくものであることはほゞ誤りないと思われる。又この分布がほゞ安行Ⅱ式の盛行した分布範囲を踏襲するかにみられる点は興味がある。これは姥山Ⅱ式土器の器形・文様のように、いくつかの安行Ⅱ式の伝統がうけつがれていることと無関係ではないと考えられる。



姥山Ⅱ式土器出土遺跡分布図

- | | | | |
|---------|---------|--------|--------|
| 1. 多古田 | 2. 荒海 | 3. 花輪 | 4. 金堀台 |
| 5. 天神台 | 6. 姥山 | 7. 真福寺 | 8. 膝子 |
| 9. 築地 | 10. 板倉沼 | 11. 杉田 | 12. 広畑 |
| 13. 堀の内 | | | |

四 安行Ⅲ諸型式土器との対比

以上の如き姥山Ⅱ式土器が、広義の安行Ⅲ式土器の中に抱括されるものであることは疑い無いが、具体的にその中のいずれの土器型式に対比されるべきものであるかを決定するのは、かなり困難な問題である。筆者は先きに姥山Ⅱ式土器が、安行Ⅱ式土器の要素のいくつかを引きついでいることを指摘しておいたが¹³本稿においては安行Ⅲ諸型式との関係について検討してみたい。先づ安行Ⅲa式土器と姥山Ⅱ式土器を対比させると、以下の様な点が指摘される。¹⁴

① 安行Ⅲa式土器を特徴づける文様要素が彫刻的三又文ないし三又状入組文にあるとするならば、姥山Ⅱ式土器にはそれらが極めてわづかしか認められない。

② 安行Ⅲa式土器の口縁部裝飾ないし口唇上につけられる突起は、まだ安行Ⅱ式の突起をそのままうけつぐか、極めて酷似したものであるのに対し、姥山Ⅱ式のそれは、粘土紐による貼付文となる場合が多く、安行Ⅱ式の伝統を引くものは著るしく

減少している。換言すれば、安行Ⅲa式土器の口縁部裝飾ないし突起が立体的であるとすれば、姥山Ⅱ式のそれは平板的であるといえる。

③ 安行Ⅲa式に伴う粗製土器は、多くの場合口縁直下及び胴部最大径付近に指圧の施された紐線がめぐり、口縁断面は外側に肥厚する傾向をみせるものとして従来理解されて来たようである。これに対し、姥山Ⅱ式土器においては口縁全体がやや肥厚するのみで、紐線文を欠いており、全面に条線を施すか無文とするのみの簡素な土器となる。

①及②に挙げた点は、安行Ⅲa式と姥山Ⅱ式における精製土器の文様要素が相異していることを示している。なかでも両者の口縁部裝飾ないし突起の相異は顕著であつて、これは両者の類別を容易にしている。又姥山Ⅱ式土器にあつては口唇上に、ある一定の間隔をおいて数十本の細刻を施したものがみられるが、これなども安行Ⅲa式では一般的なものとは思われず、両者を区別する場合の基準の一つになり得ると考えられる。③に挙げた点は両者における粗製土器の形態の相異でありこれも重要な問題である。この両者の粗製土器が、共に安行Ⅰ・Ⅱ

式の粗製土器の伝統を引くものであることは明らかであるが、口縁部の形態からみて安行Ⅲa式の粗製土器の方が、より安行Ⅱ式の粗製に近似しており口縁部に粘土紐を欠く姥山Ⅱ式の粗製土器はそれよりさらに退化した形態を示すものである。この様な粗製土器における相異と、先に示した①及②の如き精製土器の相異とを考慮するならば、姥山Ⅱ式土器は安行Ⅲa式と合致する土器型式ではなく、それよりもむしろ後出する土器型式とするのが正しい認識といえよう。

次に安行Ⅲc式土器と姥山Ⅱ式土器を対比させると次の様な相異が指摘される。

① 安行Ⅲc式土器は縄文の消滅と云う点に大きな特色を有するが、姥山Ⅱ式土器に於いては磨消縄文手法が盛行する。

② 安行Ⅲc式を特徴づける文様として、三叉状入組文・沈線による連続孤線文・米粒状の列点などがあげられているが、これらは姥山Ⅱ式土器には認められない。

③ 姥山Ⅱ式土器には、一部の半精製土器及び粗製土器の胴腹部に、安行式特有の斜方向の条線が施さ

れるのに対して、安行Ⅲc式土器においては、この種の条線はほとんど施されなくなり、胴腹部を素文とする傾向が顕著である。

①に挙げた点は、安行Ⅲc式と姥山Ⅱ式における文様表出技法の差異を示したものであり、この問題は安行Ⅲc式と他の安行Ⅲ諸型式土器との差異を論ずる場合常にとりあげられて来たもので、ことさらに多言を要しない。この点からみても姥山Ⅱ式と安行Ⅲc式が異なる土器型式であることは了解し得る。②に示した文様要素の相異も又これと同様に解せられよう。③に示した条線の問題は、姥山Ⅱ式土器が、加曾利B式に始まり安行Ⅱ式にまで伝統的に引きつがれて来た粗製の器面調整法の流れをくむものであることを明らかに示している。これに対し、安行Ⅲc式が、その様な器面調整法をもちや欠除していること云うことは、とりも直さず、安行系土器の伝統を失いつつあることを示していると考えられる。従つて、これらと①及②に示した差異からみて、安行Ⅲc式は姥山Ⅱ式よりも後出する土器型式であると見るべきである。

以上の如き対比を行つた結果、姥山Ⅱ式土器は、安行

Ⅲ a 式よりも後出の、また安行Ⅲ c 式に先行する土器型式として規定されることになり、⁽¹⁵⁾ 时期的には一応安行Ⅲ b 式に相当するものと考えられる。それならば次に姥山Ⅱ式土器は、従来云われていた安行Ⅲ b 式土器と一致する内容を有するものであるか否かが当然問題となろう。

従来安行Ⅲ b 式土器に関して、まとまった土器型式の内容を具体的に説明した文献が極めて少く、又実際の資料もさほど多くは提示される機会が乏しかった。かかる情勢の下で、石神貝塚において安行Ⅲ b 式が、安行Ⅱ式と同一層内に混在して発見されたことなどから、安行Ⅲ b 式土器の独立をあやぶむ傾向も一部に存在する様であり、⁽¹⁶⁾ 又安行Ⅲ諸型式が設定された当時においても、安行Ⅲ a 式ないしⅢ c 式と、安行Ⅲ b 式との差異⁽¹⁷⁾ について、十分な説明は示されていなかったようである。⁽¹⁸⁾ しかし乍ら、吉田格氏の石神貝塚における調査成果、⁽¹⁹⁾ 山内清男博士の説明など、⁽²⁰⁾ いくつかの資料に基いて安行Ⅲ b 式の特徴をとりあげることが必ずしも不可能ではない。山内博士・吉田格氏等によると、安行Ⅲ b 式は以下の様な特徴を有する型式と考えられる。

① 粗製土器は口縁に紐線を伴うもので口縁断面は外

側に肥厚する傾向を示す。

② 粗製土器には条線を有するものは少くなる。

③ 口縁と胴部に横走る二本の紐線間に曲線による文様が描かれ、その中が紐文によつて填められる場合もある。

④ 精製土器にみられる扇状突起の高さが低くなる。

⑤ 安行Ⅱ式にみられる様な瘤はつけられなくなる。

⑥ 文様は曲線と彫刻的三叉文が主要なもので、コンパス文様の磨消帯縄文・入組帯縄文などが描かれる。

⑦ 口縁の突起は二頭あるものが多いが、特に粘土帯を貼付したものが特徴をなしている。

⑧ 口縁が外反し、頭部がやや集約した形態の土器が顕著となる。

⑨ 一部の土器には縄文を全く用いることなく文様を表出するものが認められる。

これらの内で①～⑥までは吉田格氏報告書⑦～⑨は山内氏解説文より引用したが、これら列挙された特徴を要約すれば、(I)精製土器と粗製土の組合せは、依然安行Ⅰ・Ⅱ式にみられる様な帯縄文系土器と、紐線文系土器

の二大別から成っている。(II)磨消縄文手法によつて文様が描かれ、三叉文も主要な文様の一つとみられる。しかし一部には、縄文を用いぬものもある。(III)口縁部の突起は、粘土貼付文が特徴的となり、安行Ⅱ式の様な立体的な突起はなくなる。この様な安行Ⅲb式の特徴と姥山Ⅱ式の特徴を対比させると、

- ① 磨消縄文手法によつていくつかの文様が描かれる点は両者共通している。
- ② 口縁部突起の特徴も、やはり両者合致している。
- ③ 精製土器と粗製土器の組合せは、両者共、安行Ⅱ式の伝統を引いていると云う点では一致している。

以上三つの点で両者は共通性を持つてることが指摘し得る。しかし乍ら以下の様な差異も又存在する。

- ① 姥山Ⅱ式を特色づける特異な文様と見られる稲妻状磨消文様・連続棒状文などは、安行Ⅲb式の文様として従来明確に指摘されたことがない。

- ② 姥山Ⅱ式においては、彫刻的三叉文・三叉入組文は極めて稀であり、連続波状入組文などが多用されるのに対し、安行Ⅲb式においては彫刻的三叉

文・三叉入組文などは主要な文様の一つとして存在していると云われること。

- ③ 姥山Ⅱ式の粗製土器は、紐線文を欠くことを特徴とし、又条線を有するのに対し、安行Ⅲb式のものには紐線文が認められ、かつ条線が減少していること。

- ④ 山内博士が安行Ⅲb式とされたものの中には、縄文を用いずに文様を表出する一群の土器が含まれているのに対し姥山Ⅱ式はその様な縄文を用いぬ土器はほとんど存在しないと考えられること。

以上の様に、姥山Ⅱ式と安行Ⅲb式との間には、類似点相異点が相半ばしており、直ちに両者の関係を云々することが困難な状態にある。しかしここでもし両者の相異よりも類似点をより重視するならば、安行Ⅲb式土器は、安行Ⅲ諸型式土器の中で最も姥山Ⅱ式土器に近似した様相を持つものであると云える。従来知られていた関東地方晩期の土器型式と姥山Ⅱ式と対比させた場合、安行Ⅲb式以外のものをその対比資料としてあげることが恐らく困難であるかも知れない。この様な点と、姥山Ⅱ式が先にも述べたごとく、時期的には安行Ⅲb式に相当

するあたりに編年される可能性があることを考慮するならば、現状においては多少検討が不十分なきらいがあるとしても、姥山Ⅱ式を安行Ⅲb式対比の土器型式として規定しておくことも全く不可能ではないかも知れぬ。ところが、相異点の④に示したような、縄文を欠除しつつ文様を表出する一群の土器も又、安行Ⅲb式の一特徴と認めることが正しいならば、両者の対比は根本的に再検討されねばならなくなる。かかる一群の土器に近似した様相を持つものは、筆者の云う姥山Ⅲ式土器に求められると思われる。この姥山Ⅲ式は姥山遺跡において、姥山Ⅱ式と層位的には分離されなかつたが型式学的には分離さるべきものであると認められ、前述した築地遺跡においては、かかる姥山Ⅲ式は多量の姥山Ⅱ式土器の中に極めてわずかに存在したに過ぎなかつた。これらは姥山Ⅲ式が姥山Ⅱ式とは本来分離し得るべきものであることを示していると考えられる。もしかかる一群の土器が、本質的に安行Ⅲb式の一要素として認められるならば、姥山Ⅱ式と姥山Ⅲ式は同一の土器型式を構成するものとして、その分離は不可能となるわけである。筆者は前述した築地遺跡の実例からみて、姥山Ⅱ式とⅢ式の分離に

は、かなり高い信頼性があると思う。従つてこの問題は単に姥山Ⅱ式及Ⅲ式の側からする検討のみでは不十分であり、安行Ⅲb式の側からも検討する必要がある。従来安行Ⅲb式に関しては、その内容が具体的に説明されたことが少く、特に縄文を欠除した一群の土器についてはそれが安行Ⅲb式として明確に規定されてはいないようである。従つて、これらの一群の土器をいかに処理するかについての、はつきりした成果を見ぬままに、姥山Ⅱ式と安行Ⅲb式との対比を行うことは屋上屋を重ねる結果にもなりかねない。

以上安行Ⅲ諸型式と姥山Ⅱ式とを対比させた結果、安行Ⅲb式が姥山Ⅱ式と最も共通点の多いものであることが明らかとなり、時期的にも両者はほぼ一致する存在であると考えられるが、両者を同一な土器型式として認めるには、現状においてはなお無視し得ぬ相異のあることも又知られるのであり、早急に両者の関係に結論を与えらるるのは危険である。筆者の見通しとしては現在両者間に見られる相異は、今後の諸検討によつて処理し得る程度のものであり、究局的には両者は同一な土器型式として認められる可能性が強いが、それに先立つて、これまで

安行Ⅲb式を認めた上で研究を進めて来られた諸先学によつて、改めて姥山Ⅱ式との関係或は安行Ⅲb式そのものに対する検討がなされ、筆者に教示を賜ることを切望するものである。

五 結 語

以上姥山Ⅱ式と命名した一群の土器について、その内容・分布・従来の晩期土器型式との対比等の諸点に関する再検討を行い、その性格を明らかにして来たが、これらの結果を要約すれば左の様になる。

- (1) 姥山Ⅱ式土器は、器形・文様上の組合せその他の点で、一つの土器型式として認定されるに十分な型式上の特徴を有している。
- (2) この様な姥山Ⅱ式土器は、現在十四ヶ所以上の遺跡から出土したことが知られており、一定の分布圏を持つものである。
- (3) 姥山Ⅱ式の分布圏は、現在判明した所によれば関東地方東南部をその中心とし、一部北ないし関東西南部に及んでおり、これは大体において安行Ⅱ式の盛行した地域と合致するようである。

(4) 姥山Ⅱ式土器は、安行Ⅲ諸型式と対比させた場合には、安行Ⅲb式に最も近似した様相を持つものであることが知られる。

(5) しかしこの姥山Ⅱ式は、安行Ⅲb式と全く一致するのではなく、両者間にはなお無視し得ぬ相異も介在する。

(6) この様な相異は、姥山Ⅱ式の研究によつてのみ解決するものではなく、安行Ⅲb式の再検討も必要なことは明らかである。

さて、ここに至つて問題とされるのは、安行Ⅲb式の再検討と云う問題を、いかに扱うべきかと云うことである。この課題は単に安行Ⅲb式土器のみに限らず、安行Ⅲ諸型式土器全体の問題と密接に関係するものであることは云うまでもないが、今しばらく安行Ⅲb式にのみ限定して、筆者の私見を述べてみたい。

先づとりあげるべきものは、安行Ⅲb式土器の特徴を認識するさい、現在二つの異つたみかたが存在するらしいということである。その一つは山内清男・吉田格両氏に代表されるような、安行Ⅲb式の文様の多くは磨消繩文手法によつて描かれるとする見解であり、これが安行

Ⅲ b 式の特徴について従来最も一般的に云われていたものと云える。他方は、磨消繩文手法を用いずに文様を表出するが、その文様はなお安行Ⅲ c 式とは区別し得るような一群の土器をも、安行Ⅲ b 式と呼ぶ麻生優・金子浩昌両氏の見解である。これは先の山内・吉田両氏の見解のように、土器型式の一般的説明として特にとりあげて論じられたものではなく、金子氏の場合は成田市花輪貝塚の⁽¹⁹⁾麻生氏の場合は東京都上目黒東山遺跡の出土資料⁽²⁰⁾の分類にあたって、そのような土器を安行Ⅲ b 式に相当するものとして説明されたことによるのであるが、いずれにしても、先の山内・吉田両氏のそれとは、かなり対照的な見解であると云える。このような一見対立するかに見える二つの見解が、学史的にいかなる経過を経て今日に至つたものであるか、筆者には不明であるが、「3 b 式と云われて来た文様の大部分は 3 a 式の特徴的な土器の文様中に混じて表現されている例が多かつた。」と云う坂詰氏の最近の見解からみれば、⁽²¹⁾かかる二つの見解は、一方が他方の発展的解消としてあらわれたものとみるよりもむしろ、今日においてなお併存し得るものであり、両者共未解決な問題を内包しているものと考えられ

る。それ故先にもふれたように、安行Ⅲ b 式として従来認識されて来たものの中には、文様表出技法を異にする二つの土器群が存在していることになる訳であり、従つて、この両者が本質的に同一な土器型式を構成するものであるのか、地域的な土器型式の相異に基くものか、或は全く別個な土器型式として分離さるべきものなのかを明らかにする必要に迫られる。筆者はこの場合、型式学上からみて、前者を姥山Ⅱ式、後者を姥山Ⅲ式として区別し、築地遺跡においてはほぼ両者の分離をうらづける結果を得た。そしてこの姥山Ⅲ式は、個々の文様の細部におけるあるていどの変化はあつても、繩文を用いずに文様を表出し、かつ安行Ⅲ c 式とは異なるものと認められると云う点では、金子・麻生両氏の示された資料とほとんど一致するようである。従つて筆者は現在にあつては、安行Ⅲ b 式土器は、多くの場合磨消繩文手法によつて文様が描かれると云う立場に立ち、その場合の姥山Ⅱ式の諸特徴が、安行Ⅲ b 式のそれとほぼ一致すると云う点及び姥山Ⅱ式と姥山Ⅲ式が、相互に分離し得るとみられる証左のある点に基いて、安行Ⅲ b 式と云われていたものの内で繩文を用いずに文様を表出し、なお安行Ⅲ c

式とは文様その他の点で区別し得る一群の土器は、安行Ⅲb式とは別個に分離して考えるべきではないかと思ふのである。⁽²²⁾

次に問題となるのは、筆者の云う稲妻状磨消文様及び連続粹状文と云つたものが、安行Ⅲb式の文様としてみおとされていたのではないかと云う点である。先にもふれておいた様に、千葉県印旛郡天神台貝塚より出土した稲妻状磨消文様を持つ土器片は、報告者によると、安行Ⅲa式対比資料として説明されていた。⁽²³⁾ かかる実例から推定すると、稲妻状磨消文は、ある時代には安行Ⅲa式土器の一部として考えられていたことにならう。しかし乍ら、埼玉県井沼遺跡千葉県香取郡奈土貝塚などの安行Ⅲa式土器を多く出土した遺跡からは、かかる文様を持つ土器が十分な量で伴出したと云うことが明らかにされていない。⁽²⁴⁾ 又連続粹状文も、千葉県花輪貝塚出土土器において、やはり安行Ⅲa式に相当するものとして説明されている。⁽²⁵⁾ これらの点からみて、かかる二つの文様は、過去において安行Ⅲb式以外の土器型式に関連して考えられていた可能性が大である。この様な点が修正されるならば姥山Ⅱ式は安行Ⅲb式にほぼ一致する内容を

持つものとして認められるだろう。

最後にとりあげられるのは、三叉文ないし三叉状入組文の性格を、安行Ⅲ諸型式においていかに評価すべきかと云う問題である。姥山Ⅱ式土器においては、三叉文ないし三叉状入組文が全く存在しないと云う訳ではないが少くとも姥山Ⅱ式においては、それらの文様が型式の特徴として最優先にとりあげられるような顕著な存在でないことはくり返し述べて来た所である。又同じく三叉文をその特徴とする型式であると云われた安行Ⅲa式についてみれば、埼玉県井沼遺跡、千葉県奈土貝塚その他二・三の遺跡の実例で知られるように、今日ではこれまでに安行Ⅲa式といわれていたものは、安行Ⅱ式の一部に含まれるかそれに極めて密接に関係するものとして理解される大勢にある。⁽²⁶⁾ 要するに三叉文ないし三叉入組文を有する土器は恐らく安行Ⅱ式の組成の中に含まれて存在するものと考えられているのである。そしてこれらの文様は、関東土着の後期末の土器型式の中からは生まれ得ない、東北地方からの影響によつてもたらされた所の、所謂非関東的な文様であることは明らかである。この様な非関東的な文様が、関東土着の晩期土器に次第に影響

をつよめついに関東独自の文様として消化され定着するのは、ほゞ安行Ⅲc式の時期である。換言すれば、三叉文ないし三叉状入組文は安行Ⅲ諸型式において、非関東的な文様から、次第に関東独自のものへの転化・定着と云う変遷をたどることが、巨視的に看取される。従つてこのような文様が、安行Ⅲ諸型式を特徴づける文様として従来とりあげられて来たことは十分理由のある事であつた。しかし安行Ⅲ諸型式土器にあつては、かかる文様の変遷とはうらはらに、後期末の安行Ⅰ・Ⅱ式から引きついだ所の、所謂関東独自の諸特徴を漸次消滅させて行くと云う現象も又併行して起つていたのであり、かかる関東独自の特徴・換言すれば安行Ⅰ・Ⅱ式の伝統がようやくたどり難くなるのがやはり安行Ⅲc式の時期であると云える。安行Ⅲ諸型式が巨視的にみて、関東独自の諸特徴を漸次消滅させつつも非関東的な要素を次第に消化し、独自のものに転化させて行くと云う経過をたどると解するならば、安行Ⅲ諸型式において、三叉文ないし三叉入組文と云つたものの変遷をとりあげる以外に、関東独自の諸特徴が、どのように変質して行くか、換言すれば関東土着の土器型式としての変遷をとらえる必要があ

る。筆者がしばしば姥山Ⅱ式・Ⅲ式において、安行Ⅱ式の伝統を引く諸要素をとりあげ、それらのいくつかを姥山Ⅱ式Ⅲ式の特徴として指摘して来た意図もそこにあると云える。以上からも知られるように、筆者は安行Ⅲ諸型式の検討を行うにあつては、三叉文・三叉入組文に代表されるような、非関東的な諸要素からする検討以外にも、関東土着の諸要素をとりあげて、吟味する必要があることを強調したのである。その様な過程で三叉文・三叉状入組文が、安行Ⅲ諸型式の中でいかに評価されるべきものであるかが自づと明らかにされるであろう。

以上安行Ⅲb式の再検討に関して、筆者の私見をのべたが、これらの見解に妥当性が認められるならば、姥山Ⅱ式は安行Ⅲb式対比の土器型式として認められることになるといえるが、その検討はぜひとも安行Ⅲb式を認めてこられた方々の側から行われることを希望したい。何故筆者がその様な点にこだわるかの理由は、一つには土器型式と云うものは一たびそれが設定されれば、時代を区分する資料としての編年的性格を持つものである従つて土器型式の設定に関しては出来るだけオープンな形で共通の知識として討議をなし得る余地を残してお

く必要があると思うからである。もしかかる検討がなし得ぬものであるならば、筆者は以上述べたような姥山Ⅱ式の諸性質をもつて、関東地方東南部における晩期前半

の土器型式すなわち姥山Ⅱ式の存在が認めらるべきものと考える次第である。

(昭和三十九年三月廿日稿)

註

- (1) 拙稿「千葉県山武郡横芝町姥山・山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて」(史学三六ノ一)
- (2) 昭和卅七年二月本塾考古学研究室が調査を行った。
- (3) 「印旛手賀」早稲田大学考古学研究室報告第八冊。
- (4) 「前掲書」一〇五―一〇六頁。
- (5) 「前掲書」
- (6) 「前掲書」二二〇頁。
- (7) 甲野勇「埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告」(史前学会小報2)
- (8) 竹下次作氏の資料は、甲野勇氏の調査された貝塚出土資料ではなく、泥炭層出土資料である。
- (9) 坂詰秀一「埼玉県石神出土の晩期縄文土器」(富士国立公園博物館研究報告第10号)
- (10) 杉原莊介・戸沢充則「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」(考古学集刊二ノ一) 蘭田芳雄「千網谷戸」
- (11) 第1表に示したパーセンテージは、築地遺跡出土の晩期土器全体のものであり、これを姥山Ⅱ式土器のみに限つてパーセンテージを考えれば、全粗製土器は(E)・(F)・(J)合計二七八個体となり全体四二二個体中の約六六%となる。
- (12) 広畑貝塚については中村嘉男氏の、杉田遺跡・堀の内貝塚・天神前遺跡に関しては杉原莊介・戸沢充則両氏の、それぞれ御教示による。
- (13) 前掲拙稿。
- (14) 筆者が安行Ⅲa式として考えているものは、埼玉県井沼遺跡出土資料(安岡路洋・早川智明「井沼遺跡」埼玉県立文化会館)千葉県奈土貝塚出土資料(西村正衛氏の御教示による)などを中心としている。又この場合筆者は安行Ⅲa式を独立した一個の土器型式のように扱っているが、これは姥山Ⅱ式との対比を行う関係上特にその特徴をとりあげたものであり、後述するように筆者は安行Ⅲa式は安行Ⅱ式の一部に含まれるものと考えている。
- (15) 杉原莊介・戸沢充則「前掲書」坂詰秀一「前掲書」
- (16) 山内清男「日本先史土器図譜」第十輯。
- (17) 吉田格「埼玉県石神貝塚調査」(人類学雑誌五十五ノ十一)
- (18) 山内清男「日本先史土器図譜」第十輯。

(19) 金子浩昌「印旛手賀」一〇四—一〇六頁。

(20) 麻生優・川崎義雄「東京都上目黒・東山遺跡の晩期縄文土器」(古代学研究卅七号)

(21) 坂詰秀一「前掲書」三頁。

(22) 安行Ⅲb式をこの様に二分した場合におこる問題の一つとして、かかる縄文を持たぬ一群の土器と安行Ⅲc式との関係をどの様に考えるかと云うことがとりあげられる。安行Ⅲc式土器が所謂西ないし西南関東に多く遺跡の存在すると云うことは、すでに多くの人々によつて注意されて来たことであつたが、最近の麻生・川崎両氏の労作によつてその事實は確定的となつた(註20参照)。所で、両氏は筆者等の調査になる山武姥山貝塚を、安行Ⅲc式出土遺跡の一つとされ、分布図に記載されておられるが、山武姥山貝塚においては少くとも目黒東山遺跡で麻生氏が安行Ⅲc式とされたような土器は、過去四次にわたる調査にもかかわらず、ほとんど検出されていないのである。山武姥山貝塚において安行Ⅲc式に対比し得るような土器をあげるとするならば姥山Ⅲ式か所謂前浦式と呼ばれる姥山Ⅳ式以外には求められない。この内で姥山Ⅳ式に関しては、分布・組成上未解決な問題をかかえており現在安行Ⅲc式の対比資料としてとりあげるのには不適當と考えられる。従つて姥山Ⅲ式がその対比資料として最も適當なものと云えるが、姥山

Ⅲ式の特徴はむしろ麻生氏が安行Ⅲb式に同定されたものに近似するのである。この点と、安行Ⅲc式が関東西部の平野に分布の中心をおくものであり、かつ又姥山Ⅱ式が東部関東に分布の中心をおくものらしい事等を参考にして考えると、姥山Ⅲ式は東部関東における安行Ⅲc式対比の土器ではないか、換言すれば奥東京湾あたりを堺にして、東西関東地方における安行Ⅲc式の様相が、かなり異つたのではないかと考えられて来る。もしそうであるならば、後期においてはほとんど同一化したかに見える東西両関東の土器型式の相異が、晩期前半に到つて再び顕著になつて来たことを示すものと云える。この様な晩期前半から中葉にかけての、東西両関東地方における土器型式の相異が、はたして確実にたどり得るか否かについては、特に東関東地方における土器型式の検討が十分でなく、いまだ推測の域を越えない。しかし最近問題とされる前浦式土器の問題などを考慮するならば、晩期前半—中葉にかけて、巨視的にみて東西両関東における相異は、かなりのものであると考えることも不可能ではない。姥山Ⅲ式ないしは、縄文を欠くが安行Ⅲc式とは区別され、一部においては安行Ⅲb式とも云われる一群の土器と、安行Ⅲc式との関係は事の当否は別としても、将来この様な方面からも検討される必要があると思われる。

(25) 註(6)参照。

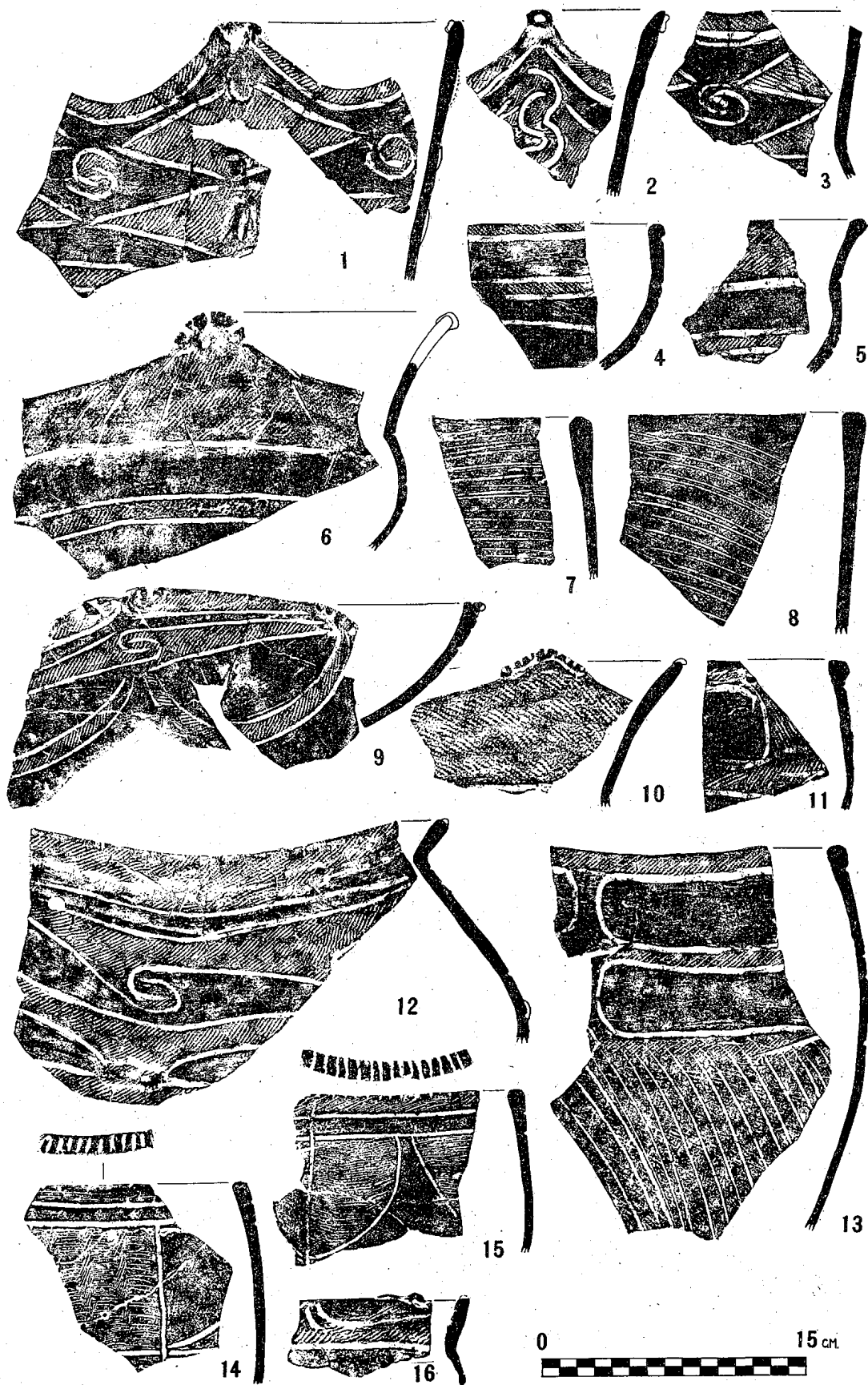
(24) 三友国五郎・安岡路洋・早川智明「井沼遺跡」(埼玉県立文化会館)、早稲田大学高等学院歴史研究部「千葉県香取郡奈土貝塚発掘報告書」

(25) 註(4)参照。

(26) 昭和卅八年十一月〜十二月にかけて、早明慶の三大学による晩期縄文文化に関する研究会が、昭和卅七年に引きつづいておこなわれた。この席上研究会のまとめとして、各大学より関東地方晩期縄文土器の編年研究の成果を発表したが、各大学共安行Ⅲa式は安行Ⅱ式に含まれるものであると云う点で意見の一致をみた。この他にも安行Ⅱ式とⅢa式を同一のものともみなす研究者はかなり多いのではないかと思われる。

(27) 坪井清足「縄文文化論」(岩波講座日本歴史Ⅰ)

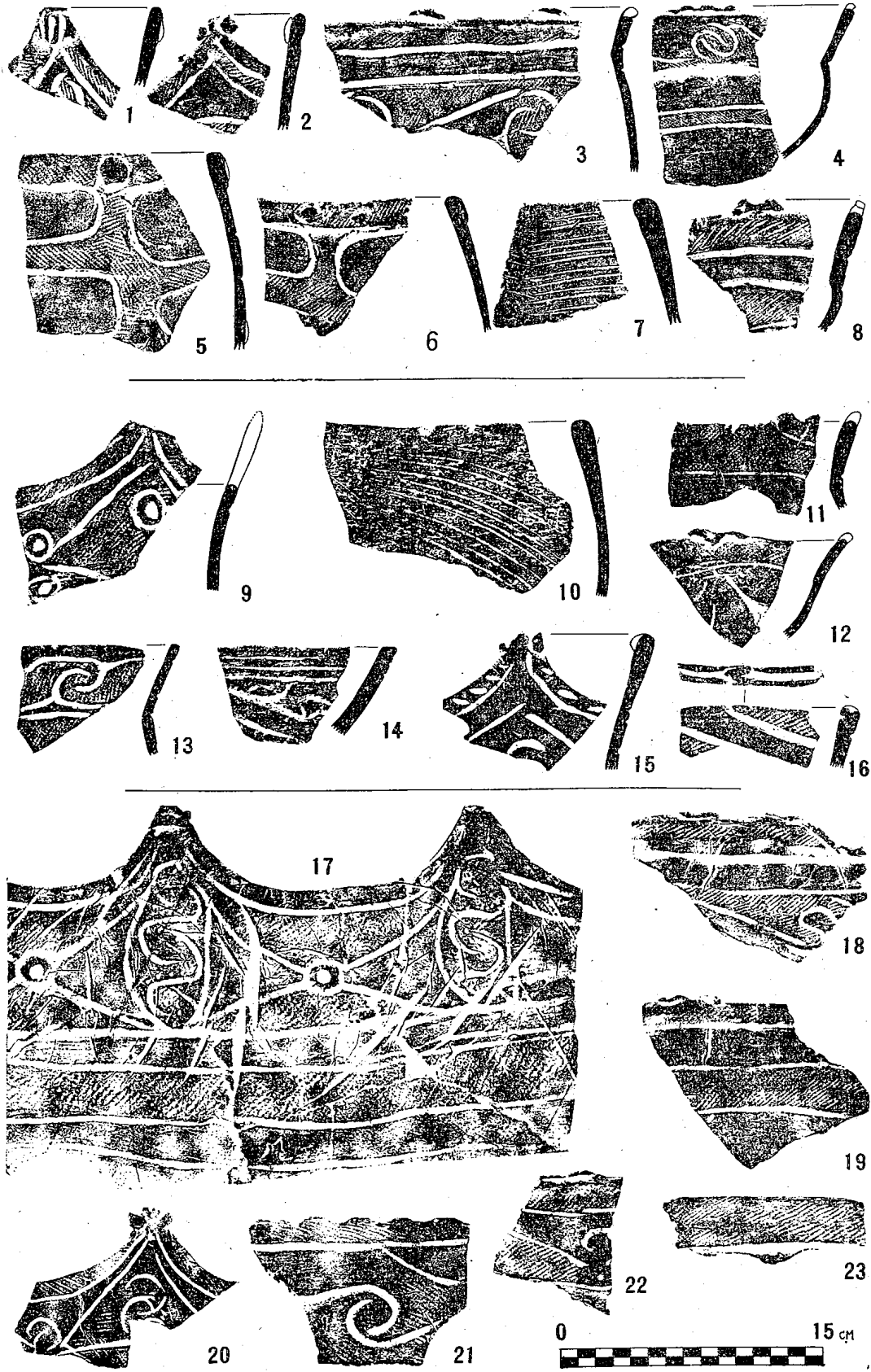
(28) 註(9)参照



(九三)

九三

第1図 1~16千葉県山武姥山貝塚

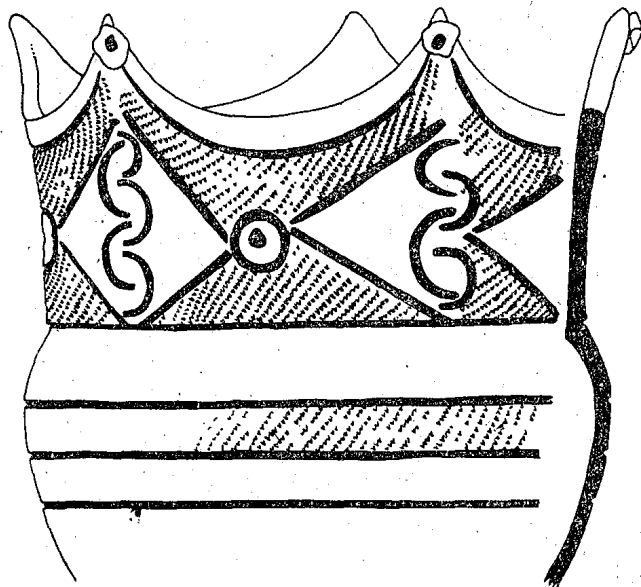
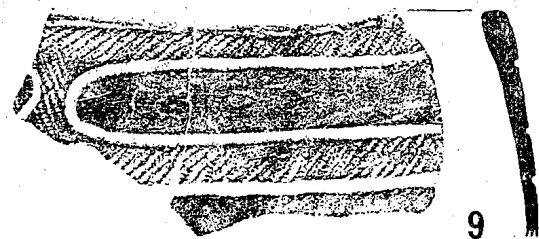
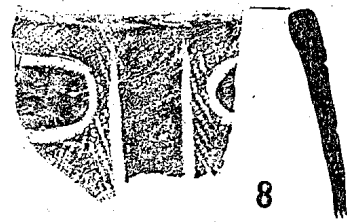
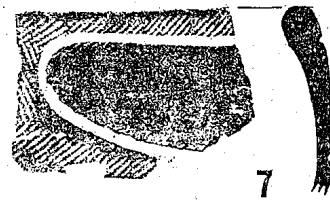
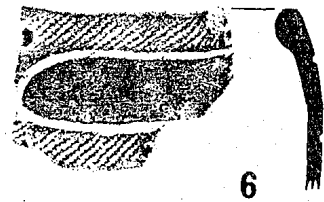
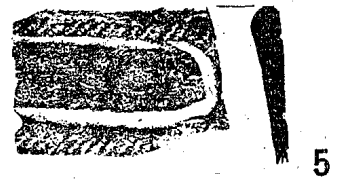
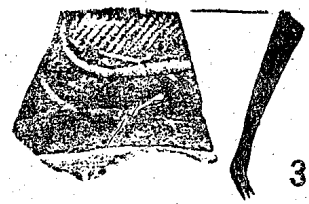
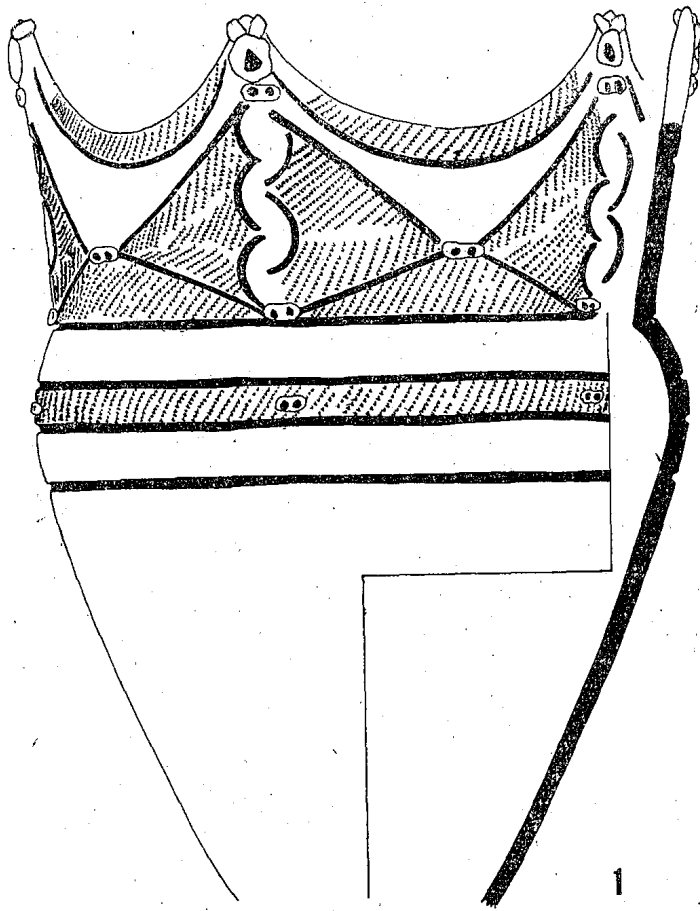


(九四)

九四

第2図 1~8千葉県荒海貝塚、9~16群馬県板倉沼遺跡
17~23埼玉県真福寺遺跡

姥山Ⅱ式土器に関する一・三の問題

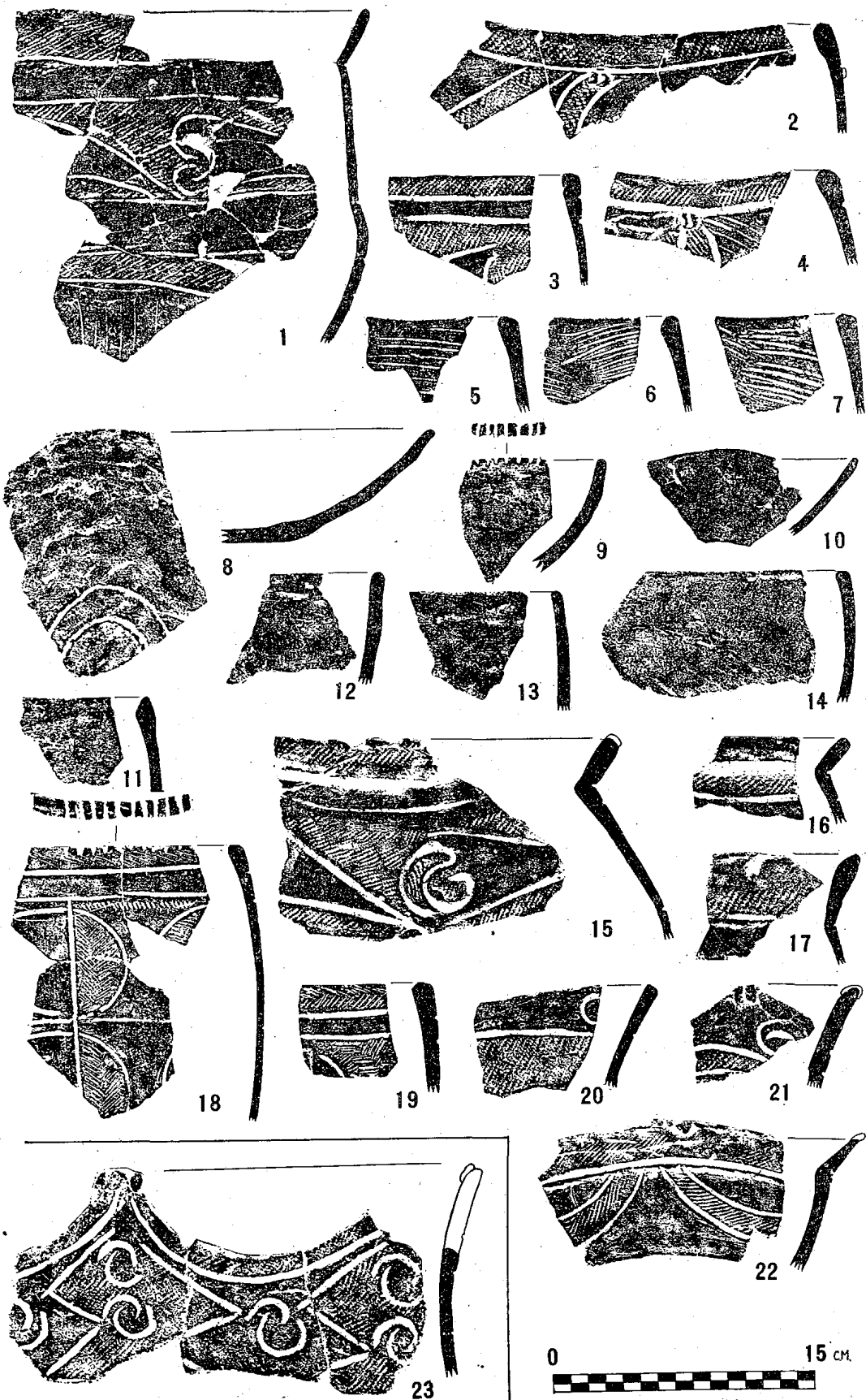


(九五)

九五



第3図 1~9茨城県築地遺跡



第4图 1~22茨城県築地遺跡、23埼玉県膝子遺跡